METEOROLOGICAL SOCIETY OF JAPAN
日本気象学会
1882 創立

天　　気

1988年1月
Vol. 35, No. 1

巻頭言

—1988年を迎えて—

理事長　山元龍三郎

新しい年を迎えるに当たり，日本気象学会の会員諸兄に新年のご挨拶をお届けいたします．我々の学会は，一時，会員数の伸び悩みや財政状況に不安を抱いたこともありましたが，会員の皆様や理事各位のご努力でそのような不安もほぼ解消されたかに思われます．そして，昨年には，気象集誌の特別号として短期・中期数値予報シンポジウムのプロシーディングスを刊行し，また，堀内会員の御好意により堀内基金奨励賞を新しく設けることができました．一方，かなり多数の会員が学会誌や国際研究集会等において，その研究・技術開発の成果を発表し，国際的にも高く評価されていることは，誠に御同慶のいたりです．

一方，わが国の経済の著しい発展に伴い，国際社会におけるわが国の立場が著しく向上して参りました．そして，わが国の気象学・気象技術に対する国際的な期待が益々大きくなってきました．これに対して，われわれの日本気象学会の今までの活動は充分だとは申せません．気候変動国際協同研究計画（WCRP）等の国際協同計画において，会員諸兄が大きく寄与されることが要請され，既にかなりの数の会員が個人として活躍されていることは周知のことであります．しかし，学会として，国際的な視野に立った活動を企画・実施し，世界の気象界の発展に貢献することが必要だと考えます．学会会員の大多数が国内の会員でありますので，国内活動が我々の学会の重要な目的の一つであることは申すまでもないことです．国の外に目を向けた時，日本気象学会として国際的な役割を演じる必要を痛感しているのです．

特にわが国の著しい高い技術水準を活用して，新しい気象衛星計画も提案されつつあります．それに対して，わが国の関連研究者は国際的な要請に応えるべく，非常に努力されています．しかし，学会が，それに対して何らかの形で応援し励ますことを，今まで殆んどできませんでした．また，東南アジアの諸国など発展途上国の気象関係者との協力・援助などについても，その必要性が痛感されながら学会として組織的に対応するにいたっていません．新しい年を迎えるにあたり，国内的な学会活動の一層の振興と共に，国際的な活動の企画・実施を真剣に考えたいと存じます．そのために，学会の財政基盤の強化や学会運営，特に事務局体制の整備に心掛けるべきだと思います．